

昔むかし、あるところに、ひとりの王さまがいました。王さまのまわりには、年寄りの大臣たちがいて、王さまが国を治めるのを助けていました。おかげで、王さまの力はどんどん強大になっていきました。

ことわざに、病気が治れば医者をなぐるとあるように、やがて王さまは、自分ひとりで国を治めたいと思うようになりました。

「わたしは、ここにぼんやり座って、いつも、年寄りたちのむだ話を聞いていなくてはならない。どうして、わたしのしたいようにしてはいけないんだろう」

かゆいからといって、目玉をくりぬく人がいます。

王さまは、とうとう、大臣たちになまならなくなり、大臣たちの息子を何人か集めていました。

「おまえたちには、私を助けてこの国を治める知恵と力があるはずだ。いつまで父親のそばに座って黙ってしゃべらせておくつもりなんだ。さあ、家に帰って父親を殺すんだ。おまえたちが父親に代わって力を見せるときが来たんだ」

若者たちは、家に帰ると、ほんとうに父親たちを殺してしまいました。

ところが、ひとりだけはそうしませんでした。その若者が父親を殺そうとしたとき、父親がいました。

「命を助けておくれ。何か困った事が起きたら、わしが役に立つことがわかるだろう。おできができるまでは、お尻のことに気がつかないものだ」

若者は、この言葉をとつくりと考えて、父親を遠く離れた畑の小屋にかくしました。

王さまは、若者たちを大臣に取り立てました。初めのうちは、王さまも気持ちよく国を治めていましたが、そのうち、若者たちは年寄りたちよりもっとしばしば意見をいうようになりました。一年たつと、王さまは、若者たちにうんざりしてしまいました。そこで、若者たちを集めていいました。

「わたしは、宮殿に新しい建物を建てようと思う。ただ、この建物は、上から下へと建てなければならぬ。まず屋根のつぺんから始めて、地面の床で終わるように。できなければ死刑にする」

若者たちは、大変心配しながら家に帰りました。

父親の命を助けた若者は、夜になると畑に出かけて行って、父親にこのことを話しました。

「王さまが、建物を上から下に向かって建てるようにとおっしゃるんだ。できないと死刑になるんだ」

父親は、ほほえんで、

「年寄りなら座っていて見えるものが、若い者は立っていても見えないものなんだよ」といって、どうすればよいか教えてやりました。

つぎの日、若者たちは、びくびくしながら王さまの前に出ました。父親の命を助けた

若者は、胸を張っていいました。

「王さま、わたしたちは、新しい建物をあなたの指図通りに立てる準備ができています。まずは、いつもの通り、建物の主人である王さまに、基礎となる石を置いていただきますと思います」

王さまは驚いて、

「そんなこと、できるわけがない」といいました。それから、「だれがそのような知恵をさずけたんだ。おまえの考えではあるまい」とたずねました。そこで、若者は、父親を殺さなかったことを白状しました。王さまは、若者の父親を呼び寄せ、第一の大臣に取り立てて、いいました。

「これからは、おまえの知恵でこの国を導いてくれ。年寄りなら座っていて見えるものが、若者は立っていても見えないもんだからな」

おしまい

原話：『世界の民話7』中山淳子訳／ぎょうせい
再話：村上郁